

想起判断で指示されている私とは何か - 想起判断における IEM をめぐって[仮]

福田敦史 (慶應大学)

概略

「自己同定とは何か？」という今回のワークショップタイトルの下で、本発表では、一人称言明に関するいわゆる「誤同定による誤りに対する免疫 (immunity to error through misidentification) [以下、適時 IEM と省略]」を取り上げることにする。その際、この主題を特に記憶言明、より正確には、自身の経験を思い出すという想起判断に焦点を絞って論じることにはしたい。もちろん、想起判断の IEM について検討した結果得られた成果は、一人称の知覚判断の IEM に関しても、ある論点を提供することになるので、そのことについても触れることにする。

この発表での中心的なテーゼを一言で先に述べておこなうならば、「想起判断が IEM を持つのは、知覚判断が IEM を持つのと同様である」というものである。少しばかり敷衍するならば「想起する私 (remembering I) と想起されている私 (remembered I) との同一性ないし IEM が保証されているのは、知覚している私と知覚されている私との同一性や IEM が保証されているのと同様である」というものである。今の段階では、あるいは、これは突飛な主張に思われるかもしれないが、議論を進めていくことによって、最終的に「なんだ、そんな当たり前のことか」といった反応が予想されるような、ごく平凡な主張であることを納得していただけるものと思う。

さて、ウィトゲンシュタインやシューメイカーらが中心的に取り上げたような一人称現在形の自身の内的感覚に関する言明や、知覚判断に関する場合、その IEM を否定する論者はそれほどいないのではないだろうかと予想される。例えば「私は赤いリンゴを見ている」という知覚判断の場合、私を指示するという自己同定に失敗することはなく IEM があるというわけである。

これに比して、自分の過去の体験を思い出す際の想起判断についての IEM となると、こちらには反対する人が多くいることは予想できる。「私は先月、自分の両親とレストランに行ったことを思い出している」といった判断の場合、「いま想起している私」が、「先月レストランに行った私」を指示することに必ず成功することなど保障されていないように思われるからである (例えば、伝統的な人格の同一性の問などを参照)。

だが、想起判断の IEM に否定的な考え方には、ある先入観が潜んでいるように思われる。それは、想起判断における自己同定に関して、現在の想起主体として指示される私と、過去の経験主体として指示される私とを別個に取り出せるとする謬見であり、あるいは、想起判断での自己指示とは、想起しているただいま現在のこの私 (のみ) が指示されているのだとする謬見である。

しかし、想起判断での指示対象とは、こうしたものではなく、いま現在から過去の体験の時点まで時間的に延長している（あるいは過去から現在まで時間的に延長している）存在者としての私なのである。想起判断において IEM があるということは、想起判断の主体である私という存在者が、「過去の私」と「現在の私」と分離されて指示されるようなあり方をしているのではなく、「過去から現在の私（現在から過去への私）」として、そこでは同定判断を介在させることのない「同定自由 (identification-free) [同定判断に依存しない]」なあり方をしている、ということになるのである。

さらにこのことは、一人称の知覚判断における自己同定に関しても、ある考え（例えば通俗デカルト的な考え）を拒否することになる。知覚判断における自己指示の指示対象とは、決して、現在ただいま存在し知覚している私にとどまるのではない。やはり、現在の知覚に関する判断であっても、過去から現在にまで延長している存在者としての私が指示されているのである。。

しばしば、記憶や想起というものは、現在と過去とをつなぐ能力として表現されることがある。こうした表現が完全に誤りであるわけではない。しかしながら、想起という経験が、想起している現在と想起されている過去の経験とを結びつけているのは、私（そして、私たち人間）という存在者の時間的な存在のありようなのである。そして、自己指示や自己同定は、こうした時間的に（そして空間的に）存在している私という人間を常に指示している働きなのである。